View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

関西学院大学リポジトリ
Kwansei Gakuin University Repository

高校生の福祉の仕事に対するイメージや就職意識の実態 ： 兵庫県の高校生に対する実態調査の結果をもとに

著者	石川 久展, 大和 三重, 胡 宝奇
雑誌名	Human Welfare : HW
巻	10
号	1
ページ	57-65
発行年	2018-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027437

〔論　文〕

高校生の福祉の仕事に対するイメージや就職意識の実態

－兵庫県の高校生に対する実態調査の結果をもとに－

石　川　久　展[*1]、大　和　三　重[*1]、胡　　宝　奇[*2]

1. はじめに

1990年代以降、福祉職や保育士・介護職の人材不足の問題が時代の経過とともに深刻化しつつある。1990年代には、特に、介護職は、建設業やサービス業などの3K（きつい、汚い、危険）労働の一つに数えられ、それらの3Kに加え、「休日少ない」、「休暇がない」、「給料安い」、「希望がもてない」など、6Kあるいは7K職種と考えられるようになり[1)]、その職業に対する負のイメージは現在も根強く残っている。ところがその一方で、2000年の介護保険制度導入後、わが国の高齢者人口比率が20％を越えるなど急速な高齢化社会を迎え、それに伴い要介護高齢者数や認知症高齢者数が増加し、介護サービスを提供する介護人材の必要性と人材確保は、わが国でも大きな社会問題となっている[2)]。また、2010年代になると、保育所の待機児童問題が年々大きな問題となっており、その背景には、保育所に従事する保育士不足の問題があり、保育士の人材確保においても労働条件の過酷さが大きな課題となっている[3)]。以上のように、2000年以降、福祉や介護、保育を担う若者の人材不足の問題は、一層深刻化しており、これらのサービスを担う福祉人材の確保が喫緊の課題となっている。しかし、その一方で、福祉の人材を担う若者に対する福祉の仕事に対するイメージや就職意識の実態に関する調査はほとんどなされていないのが現状である[4)]。

そこで、本研究においては、こうした社会の情勢を踏まえ、兵庫県社会福祉協議会人材福祉センターが中心となり、兵庫県教育委員会、兵庫県にある高校やキャリア指導担当教員等の協力を得て、兵庫県にある全高校の高校2年生を対象とし、福祉のイメージや就職意識に関する実態調査を行うことにより、福祉に関する人材確保・定着に関する基礎資料を収集することを目的とする。

2. 調査方法

1）調査対象者と調査方法

兵庫県内の県立及び私立高校に通う高校生を調

キーワード：福祉の仕事のイメージや就職意識、高校生に対する調査

＊1 関西学院大学人間福祉学部教授
＊2 関西学院大学大学院人間福祉研究科修了生

1）石川久展（1992）「社会福祉施設の人材確保についての一考察：労務管理論の視点から」『テオロギア・デイアコニア』Vol.24、pp.73-87。

2）大和三重（2012）「少子高齢化社会と高齢者福祉－介護を支える人的資源の研究」芝野松次郎・小西加保留編『社会福祉学への展望』相川書房、pp.131-146。

3）厚生労働省のホームページによると、保育士待機児童の解消を目指し、「待機児童解消加速化　プラン」により、平成29年度末までに約40万人分の保育の受け皿を確保することとしている。また、厚労省は、ホームページにおいて、保育士不足の現状に関するデータを示している。http : //www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11600000-Shokugyouanteikyoku

4）高校生や大学などの若者を対象とした福祉のイメージや就職意識に関する実態調査はほとんどみられないが、関連する調査としては、一般社団法人日本社会福祉養成校協会（現日本ソーシャルワーク学校教育連盟）が2009年に実施した『社会福祉士の積極的活用に向けた地方公共団体等の採用動機等と、高等学校長及び進路指導担当者の福祉・介護人材に関する認識及び進路指導の動機等に関する基礎的調査』（2010年3月）がある。

査対象として、福祉の仕事や職場に対する意識調査を実施した。調査対象者は、兵庫県内のすべての県立高校（136 校）および私立高校（52 校）に通う高校 2 年生約 5,500 人とした。調査方法は、郵送による留め置き調査法を用いたが、各高校の進路指導担当の教職員に調査票を送り、調査票を送り返してもらった。なお、送付した調査票数については、事前に各高校の定員に関する情報があったが、その定員の 10% とした。調査期間は、平成 28 年 1 月 25 日～平成 28 年 2 月 15 日であり、3,208 人の高校生から回答があった（回収率 58.3%）。

2）調査項目

調査項目については、年齢、性別などの基本属性の他、周りに福祉の仕事についている人がいるかどうかの有無、職場体験やボランティア体験の有無、交流行事、職場見学への参加の有無、福祉の仕事に対する就職意識、福祉の仕事についてのイメージ、仕事を決める際に重視することなどであった。

3）倫理的配慮

倫理的配慮としては、本実態調査の実施に際して、調査対象となる個人の名前、電話番号、住所等の個人情報を一切収集していないので、基本的にはプライバシーの保護あるいは個人情報保護法の遵守していることにはなるが、倫理的な配慮としては、調査が無記名で行われ、結果は統計的に処理され、個人のお名前やお答えが外部に漏れるようなことはないことを伝え、その上で、回答は任意とすることとした。

3. 調査結果

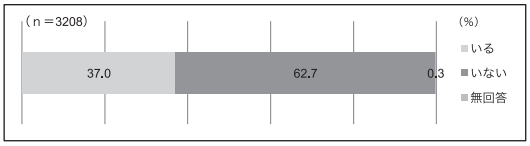
1）単純集計の結果

調査対象者の基本属性であるが、対象者を兵庫県にある高校 2 年生としているので、平均年齢は、16.9 歳であった。性別については、「男性」が 44.2%、「女性」が 52.6% であり、若干女性の方が多かった。

①福祉の仕事について

まず、「周囲に福祉の仕事に就いている、または就いていた人がいますか」と尋ねたが、結果は、図表 1-1 の通り、「いる」と答えた人は 37.0 %であり、回答者の 3 分の 1 強の高校生の周りに、福祉の仕事についている人がいることがわかった。

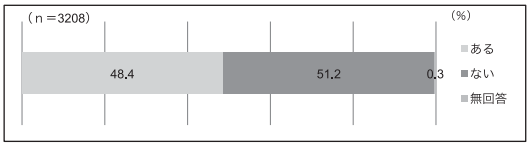
図表 1-1　周囲に福祉の仕事に就いている、または就いていた人がいますか。



②ボランティア等の参加経験について

次に、「福祉施設等で職場体験・ボランティア体験・交流行事・職場見学（社会見学）などに参加した経験がありますか」と尋ねた。図表 1-2 の通り、「ある」と答えた回答者は、48.4% とほぼ半数近くであり、兵庫県の高校 2 年生の半分が福祉に関連する仕事やボランティア体験等に過去参加していることがわかった。

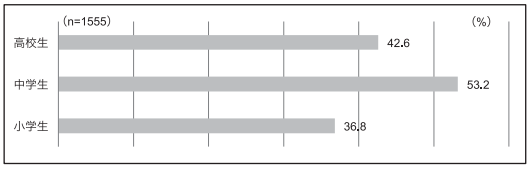
図表 1-2　福祉施設等で職場体験・ボランティア体験・交流行事・職場見学（社会見学）などに参加した経験がありますか。



それらの参加経験が「ある」と答えた回答者に対して「いつ参加しましたか」と尋ねた。

「小学生」が 36.8%、中学生が 53.2%、高校生が 42.6% となっており、中学校において福祉の仕事や行事への参加、ボランティア経験をしている回答者が最も多い結果となった（図表 1-3）。

図表 1-3　「ある」と回答した中で、いつ参加しましたか。（複数回答）

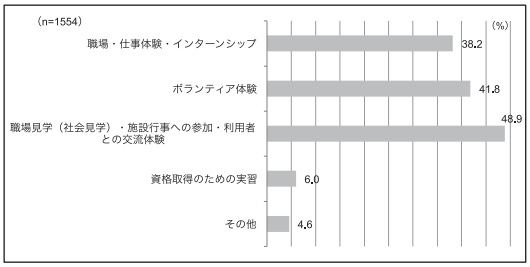


続けて、参加経験が「ある」と答えた回答者に対して「どのような経験をしましたか」と尋ね

た。

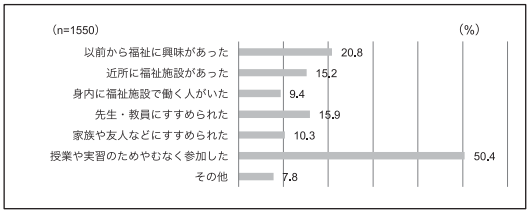
具体的な体験内容を尋ねてみると、図表 1-4 の通りの結果となった。最も多かったのは、「職場見学（社会見学）・施設行事への参加・利用者との交流体験」（48.9%）であり、次に、「ボランティア体験」（41.8%）、そして「職場・仕事体験・インターンシップ」（38.2%）と続き、これら 3 つの体験内容がほとんどを占めていた。

図表 1-4 「ある」と回答した中で、どのような経験をしましたか。（複数回答）



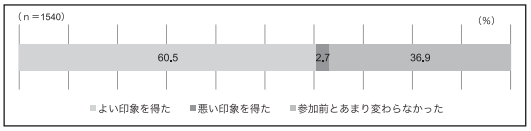
参加経験が「ある」と答えた回答者に対して「参加を決めた理由でふさわしいものを選んでください」と尋ねたが、結果は下図の図表 1-5 の通り、「授業や実習のためやむなく参加した」（50.4%）という回答が最も多かった。どちらかというと主体的に参加したというよりも、受け身的に参加した高校生が多いことがわかった。次に多かったのは、「以前から福祉に興味があった」（20.8%）であり、福祉関係の活動に過去に積極的な関わっている高校生もそれなりに多いことがわかった。

図表 1-5 「ある」と回答した中で、参加を決めた理由でふさわしいものをすべて選んでください。（複数回答）



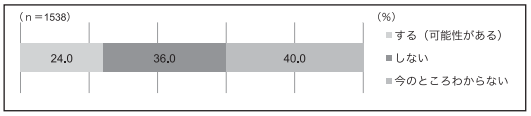
さらに、参加経験が「ある」と答えた回答者に対して「参加した後の福祉施設への印象の変化がありましたか」と尋ねた。半数以上の回答者が「よい印象を得た」と回答しており、「悪い印象を得た」と答えた高校生は、非常に少なかった。このことから、福祉活動への参加や福祉施設への見学は、高校生以下の若者たちには、一定の効果があることが示唆された（図表 1-6）。

図表 1-6 「ある」と回答した中で、参加した後の福祉施設への印象の変化はありましたか。



参加経験が「ある」と答えた回答者に対して、「これからの就職選択に影響すると思いますか」と尋ねた。「する（可能性がある）」は 24.0% と、4 分の 1 程度であり、「しない」と答えた回答者は 36.0% であった。最も多かったのは、「今のところわからない」（40.0%）であり、高校 2 年時点では、福祉への活動や施設見学が就職選択に直接的な影響を与えているとは言い難い結果となった（図表 1-7）。

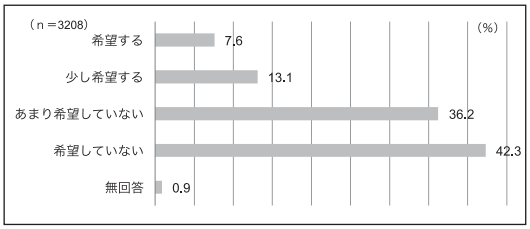
図表 1-7 「ある」と回答した中で、これからの就職選択に影響すると思いますか。



③福祉の仕事に対する就職意識について

福祉の仕事に対する就職意識について、「将来の進路として、福祉の仕事を希望しますか」と尋ねてみた。結果は、図表 1-8 の通り、「希望していない」（42.3%）と「あまり希望していない」（36.2%）と否定的な回答した高校生が 78.5% と、ほぼ 8 割を占めており、高校 2 年の段階で、福祉への就職を希望している高校生がそれほど多くないことがわかった。それでも、約 2 割の高校生は、福祉への就職の意向を示しており、全体としては、必ずしも福祉への就職意向がそれほど低くはないことがわかった。

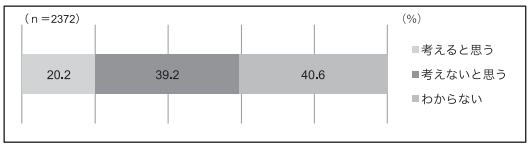
図表 1-8　将来の進路として、福祉の仕事を希望しますか。



次に、「あまり希望していない」と答えた理由について自由回答で記述してもらったが、多くの対象者である高校生が回答をしてくれた。それらの内容の例をあげると、「就く仕事がきまっている」「福祉関係の持ちに進む気がない」「あまり興味をもっていない」「絶対にやらない」「賃金を考えてします」など、実際の就職・進学の選択の影響については、福祉を仕事として選ばないという意味の否定的な回答を示す記述が非常に多かった。なお、記述として多くはなかったが「福祉の仕事をしたいと思っているから」など、福祉の仕事を選択肢に加える意向を示す記述もみられた。

福祉の仕事を「あまり希望していない」「希望していない」と回答した中で、「今後、あなたを取り巻く状況や心境の変化によっては、将来の職業の選択肢として、福祉の仕事に就くことも考えると思いますか」と尋ねた。結果は、下図の通り（図表 1-9）、「考えると思う」と回答した高校生は 20.2％であり、「考えないと思う」が約 4 割（39.2％）、「わからない」も約 4 割（40.6％）と、環境や心境の変化によって、就職の希望が大きく変化しない回答者が多い傾向にあることがわかった。

図表 1-9「あまり希望していない」「希望していない」と回答した中で、今後、あなたを取り巻く状況や心境の変化によっては、将来の職業の選択肢として、福祉の仕事に就くことも考えると思いますか。



なお、上記を選択した理由を自由回答として記述してもらった。代表的な記述としては、「介護福祉の仕事が増えると思うから」「福祉の需要は高まっていくと思うから」「将来身のまわりの人に福祉が必要になるかもしれないから」などと、福祉の仕事の重要性や必要性を記述する意見がある一方で、「何も考えていないから」「なりたい職業が決まっているから」「別のしたいことがあるから」など、自分自身の職業選択と福祉との関連性に対する曖昧な態度や姿勢の記述が割と多かった。また、完全に福祉の仕事を否定するような意見はほとんどみられず、否定するとしても自分とは関わりのないような言い回しをする意見が多かったのが特徴であった。

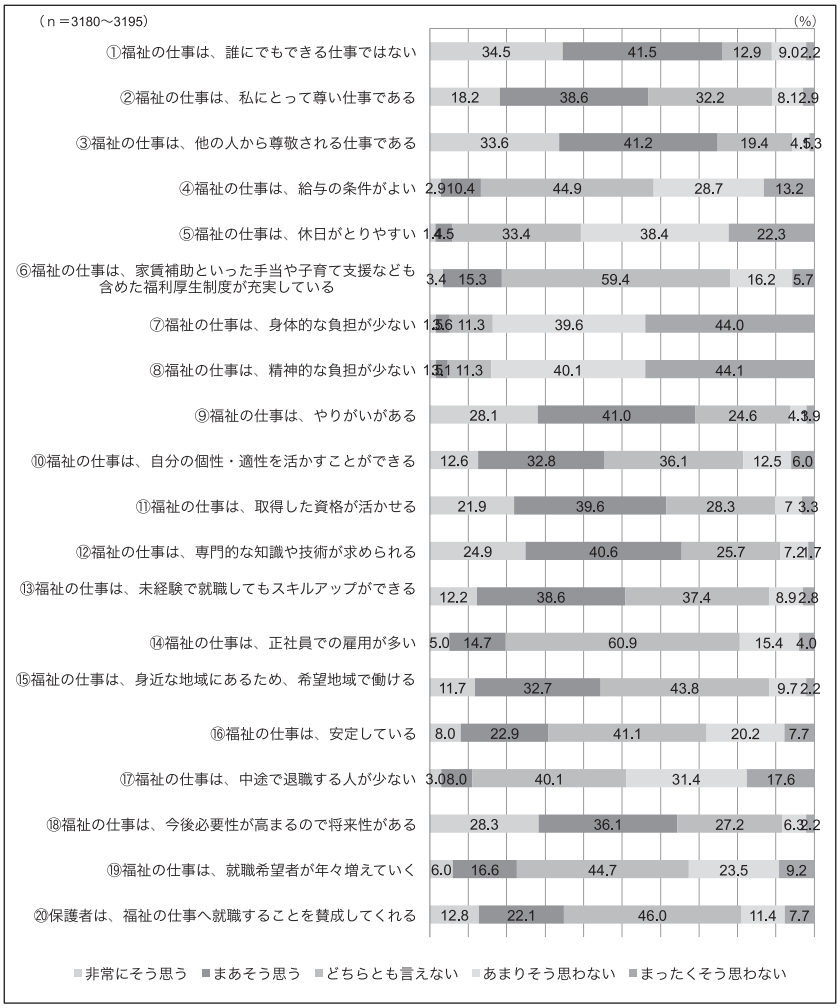
④福祉の仕事のイメージについて

次に、「福祉の仕事」（介護の仕事も含む）に関するイメージとして、図表 1-10 に福祉職の労働条件に関する項目、負担感に関する項目、やりがい、資格、能力に関する項目、社会的な評価に関する項目などの 20 の項目を尋ねた。

調査対象となった高校生の「福祉の仕事」についての特徴的なイメージとしては、まず、項目①、②、③、⑨、⑪、⑫、⑬、⑱などの質問の結果をみると、福祉職が社会的に必要とされており、尊く、大事な仕事であり、やりがいや能力が活かせる仕事であるといった肯定的なイメージを持つ高校生がいずれも過半数以上を占めていた。回答した若者たちは、一般論として、介護を含む福祉職の仕事の必要性、重要性、将来性を実感しており、福祉の仕事そのもののイメージも決して悪いわけではないことがわかった。次に、⑩の自分の個性や適性を活かせる、⑮の希望の地域で働けるなど、個人の特性や仕事先の希望が活かせる仕事としての認識がある項目については、3 分の 1 以上の高校生が肯定的なイメージを持っていることがわかった。

その一方で、項目④から⑧までの給与や休日などの労働条件や仕事の負担感に関する項目、⑭の雇用形態に関する項目、⑯の仕事の安定性、⑰の中途退職の多さに関する項目については、肯定的な回答はかなり少なかった。特に、給与や休日などの労働条件に関する項目では、9 割程度の高校生が否定的に観ていることがわかった。いずれにせよ、これから進学や就職を考える高校生にとっ

図表 1-10　あなたの「福祉の仕事」に関するイメージとして、次の①～⑳のそれぞれの項目についてあてはまるものに○を付けてください。



ては、これらの労働条件や負担感、雇用形態、安定性などの福祉の仕事に関するイメージは非常に悪いことが改めてわかった。なお、これらの福祉職のイメージに関する項目は、いずれも介護職の仕事のイメージも含まれており、介護職のイメージがそのまま表れている可能性も考えられる。

最後に、⑳の自分が福祉職に就くことを保護者が賛成してくれるかどうかについては、約 3 分の 1 が賛成してくれると考えていることがわかった。これは保護者自身に尋ねた訳ではなく、あくまでも対象者である高校生自身に保護者がどう考えていると思うかを尋ねたものであるが、否定的な回答が多いことがわかった。

2）クロス集計の結果

次に、調査データの記述的特徴を示すために、クロス集計を行った。クロス集計は、基本属性である性別、周りに福祉の仕事に就いている人の有無、福祉行事への参加経験の有無、福祉の仕事の希望、就職の進路先の分野を独立変数とし、その他の項目を従属変数とした。本報告では、カイ 2 乗検定の結果で有意差（$P<0.05$）を示した結果のみを報告することとする。

最初のクロス集計は、周囲に福祉の仕事に就いている人の有無と福祉の仕事の希望とのクロス表であるが、結果は下図のクロス表の通り（図表 1-11）、周囲に福祉の仕事に就いている人が「いる」方が福祉の仕事を「希望する」ことが有意に

多いという結果となった。逆に、就いていない人の場合、「希望していない」の回答が有意に多くなっている。調査対象者の中でも最も若い世代の高校生にとっては、自分の将来を考える上で、周囲の人々や環境の影響を受けやすいことが、この結果からみてとれる。この結果は、福祉人材の確保・定着を検討する際に、高校生本人のみならず、周囲の人々にもアプローチしていくことの重要性を示唆しているといえる。

次に、周囲に福祉の仕事に就いている人の有無別に、「高齢者福祉」「障がい児・者福祉」「児童福祉」「その他」などの福祉のどの分野を希望するのかを尋ねてみたが、結果は、図表 1-12 の通りであった。周りに福祉に就職して「いる」人の方が「高齢者福祉」「障がい児・者福祉」の分野を希望する傾向がわずかながらもあることが伺えたが、それほど顕著な傾向ということはできなかった。

福祉施設等で職場体験、ボランティア体験、交流行事、職場見学の参加経験の有無別に、将来の福祉の仕事の希望とのクロスを行ったが、その結果は、図表 1-13 に示した通りである。先に、周りに福祉に就職している人の有無とのクロス集計と同様の結果となり、「いる」と回答した人の方が「希望する」「少し希望する」と答えている割合が高く、これらの参加経験と福祉への就職希望との間に、それほど割合が高いわけではないが、因果関係があることが示唆された。これらの福祉

図表 1-11　周囲に福祉の仕事に就いている人の有無と福祉の仕事の希望とのクロス表

		将来の進路として、福祉の仕事を希望するのか				合計
		希望する	少し希望する	あまり希望していない	希望していない	
周囲に福祉の仕事に就いている人がいる	n	157	214	409	401	1181
	%	13.3	18.1	34.6	34.0	100.0
周囲に福祉の仕事に就いている人がいない	n	86	206	746	952	1990
	%	4.3	10.4	37.5	47.8	100.0
合計	n	243	420	1155	1353	3171
	%	7.7	13.2	36.4	42.7	100.0

図表 1-12　周囲に福祉の仕事に就いている人の有無と福祉の就職分野とのクロス表

		将来の進路として、どのような分野を希望するのか				合計
		高齢者	障害者	児童	その他	
周囲に福祉の仕事に就いている人がいる	n	158	44	125	30	357
	%	44.3	12.3	35.0	8.4	100.0
周囲に福祉の仕事に就いている人がいない	n	113	27	130	14	284
	%	39.8	9.5	45.8	4.9	100.0
合計	n	271	71	255	44	641
	%	42.3	11.1	39.8	6.9	100.0

図表 1-13　福祉施設等の体験の有無と福祉の仕事の希望とのクロス表

		将来の進路として、福祉の仕事を希望するのか				合計
		希望する	少し希望する	あまり希望していない	希望していない	
福祉施設で職場体験したことがある	n	195	268	524	556	1543
	%	12.6	17.4	34.0	36.0	100.0
福祉施設で職場体験したことがない	n	45	152	634	798	1629
	%	2.8	9.3	38.9	49.0	100.0
合計	n	240	420	1158	1354	3172
	%	7.6	13.2	36.5	42.7	100.0

図表 1-14　性別と福祉の仕事の希望とのクロス表

		将来の進路として、福祉の仕事を希望するのか				合計
		希望する	少し希望する	あまり希望していない	希望していない	
男性	n	46	124	550	684	1404
	%	3.3	8.8	39.2	48.7	100.0
女性	n	194	283	567	633	1677
	%	11.6	16.9	33.8	37.7	100.0
合計	n	240	4.7	1117	1317	3081
	%	7.8	13.2	36.3	42.7	100.0

図表 1-15　性別と周囲に福祉の仕事に就いている人の有無とのクロス表

		周囲に福祉の仕事に就いている、または就いていた人が		合計
		いる	いない	
男性	n	459	954	1413
	%	32.5	67.5	100.0
女性	n	697	985	1682
	%	41.4	58.6	100.0
合計	n	1156	1939	3095
	%	37.4	62.6	100.0

図表 1-16　性別と福祉施設等の体験の有無とのクロス表

		福祉施設で職場体験したことが		合計
		ある	ない	
男性	n	567	846	1413
	%	40.1	59.9	100.0
女性	n	942	740	1682
	%	56.0	44.0	100.0
合計	n	1509	1586	3095
	%	48.8	51.2	100.0

施設等での行事に、若者が参加することは、将来的に福祉への就職希望者を増やすことにつながるといえる。

基本属性の一つである性別に福祉の仕事に関連する質問とのクロス集計を行った結果（図表 1-14）、いくつかの結果に有意差がみられた。まず、男女別に将来の福祉の仕事に対する希望をみてみると、女性の方が「希望する」「少し希望する」と答えた人が有意に多かった。男性の場合、「希望する」と「少し希望する」を足しても 1 割強にしかならないが、女性の場合は約 3 割と、男性の 2.5 倍以上の割合となっている。一般的に、介護福祉士、保育士、社会福祉士のような福祉職は、男性より女性の方が多いとされているが、就職前の高校生を対象とした調査においても、同じような結果が得られた。

男女別に周囲に福祉の仕事に就いている人の有無について尋ねてみると、これも先のクロス集計と同様の結果が得られた。結果は、下記の図表 1-15 のクロス表の通りである。男性よりも女性の方が「いる」と答えたが人が 10% 弱多く、女性の方が身近なところで福祉職についている人がいる割合が高いことがわかった。

クロス集計の最後の結果として、男女別に福祉施設等での職場体験、ボランティア体験、交流行事、職場見学等の有無をみてみたが（図表 1-16）、女性の方が男性より様々な行事への参加経験の割合が有意に高いことがわかった。結果を見ると、女性の場合、半分以上が何らかの福祉関係の行事に参加していることになり、女性の福祉職に対する希望や意識の高さ、あるいは福祉職が就職の選択肢の一つになっている可能性がより高いことが示唆された。

4. 調査結果のまとめと考察

本調査では、兵庫県にある高校の学生を対象として、福祉の仕事やイメージについてその実態を明らかにすることを目的としたが、最後に、それらの結果のまとめと考察をしてみたい。対象となった高校 2 年生は、自分たちがこれまで歩んできた人生の中で、この時期にこれから進学するか、あるいは就職するのかといった大きな決断を最終学年の 3 年生で迫られるという、ある意味人生の大きな岐路に立っているといえる。一般的に高校生の 7 割は進学しているので、その多くが就職を

先延ばしにすることも含め、大学等に進学することになるが、それでも、大学等に進学しない約 3 割の高校生は、具体的な就職先の決定も含め、実社会に出ていかなければならない。そのような将来の選択肢の中に「福祉の仕事」がどれだけ加えられているのか明らかにすることを本調査の目的とした。

高校生を対象とした本で調査は、兵庫県内にある県立高校（136 校）および私立高校（52 校）の協力を得て実施することができたが、対象となった兵庫県内の高校 2 年生の定員の約 10 分の 1 程度となる 3208 人からの回答を得ることができた。

結果を簡単にまとめると、まず、これまで福祉関連の行事等に参加したことがあると答えた人がほぼ半数いたが、実際に福祉への就職を考えるとなると、「希望していない」と答えた人が 8 割近くと非常に多くなった。高校生たちが就職の際に重視することの中で上位にあげていたのは「給料・賃金」「仕事の内容・やりがい」「労働時間・休日等の労働条件」などであり、これらの点は、福祉職や介護職において最も社会的な評価が低いところであり、福祉に就職を希望しないことと労働条件等の低さなどが無関係とは必ずしも言い切れない結果であった。なお、自由記述の内容をみても、高校生たちは、福祉の仕事のやりがいと重要性については認識しているが、その反面、低賃金、過酷な労働など厳しい労働条件があることも同時に認識していることがわかる。

8 割の回答者は、福祉の仕事を希望しないという結果を示したが、その一方で、残りの 2 割の高校生は、福祉への就職の可能性やその意向を示しており、福祉への就職意向がそれほど低くはないことがわかった。自由記述の多くの記述はネガティブなことの指摘よりも、ポジティブにみる意見が多く、全体として福祉活動や行事の意義ややりがいに関することが多かった。「福祉の仕事」のイメージに関する項目の結果をみると、端的にそのことを表していると評価できる。福祉職が社会的に必要とされており、尊く、大事な仕事であり、やりがいや能力が活かせる仕事であるといった肯定的なイメージを持つ高校生が多く、介護を含む福祉職の仕事の必要性、重要性、将来性を実感しており、福祉の仕事そのもののイメージも決して悪いわけではなかった。その一方で、給与や休日などの労働条件に関する項目では、9 割程度の高校生が否定的に観ていることがわかった。これから進学や就職を考える高校生あるいはその保護者にとっては、繰り返しになるが、これらの福祉の仕事における労働条件や負担感、雇用形態、安定性などの福祉の仕事に関するイメージは非常に悪いという反面、そのやりがいや社会的な必要性や重要性については理解している。

このような結果から、今後、福祉教育機関や福祉現場など業界全体が上記の問題に取り組み、福祉の労働条件等を改善していくならば、現在、福祉への就職の意向を示している若者、あるいは就職を迷っている若者は、福祉の仕事を将来の選択肢の一つに加え、そうすることにより、福祉の人材確保や定着の問題が徐々に解消につながる可能性があるといえよう。

最後に、クロス集計の結果から、高校生という若い世代においても、男性よりも女性の方が福祉の仕事への関心や実際の行事参加度が有意に高いことがわかったが、今後は、福祉の様々な行事やイベントなど、男性に対する、より積極的なアプローチも必要となるであろう。

最後に、本調査は、兵庫県社会福祉協議会人材センターの事業の一環であり、兵庫県教育委員会、兵庫県にある高校やキャリア指導担当教員、さらにそれらの高校に通う高校 2 年生の協力を得て、実施することができた。この場をお借りして、それらの方々に御礼を申し上げたい。

Perceptions towards Jobs and Career Choices in Social Welfare : Based on Results of a Survey with Senior High School Students in Hyogo Prefecture

Hisanori Ishikawa*[1], Ohwa Mie*[1] and Hu Baoqi*[2]

ABSTRACT

This study was conducted with 11th grade students in Hyogo Prefecture, aiming to find their perceptions towards jobs and career choices in social welfare. The subjects were about 5,500 11th grade students at all public (n = 136) and private (n = 52) senior high schools in the prefecture. The questionnaires were mailed then collected by staff, resulting in 3,208 responses. The study was conducted from January 25 to February 15, 2016. The results show that the senior high school students have very negative perceptions towards social welfare jobs in terms of working conditions, a sense of burden, employment patterns and stability. Meanwhile, they understand quite well about the rewarding nature as well as necessity and importance of the jobs. The results suggest that social welfare jobs can be added as one of the career choices among young people who are currently interested in or thinking about careers in social welfare if the entire welfare industry, including educational institutions and service providers, works together to address the above-mentioned issues and improves working conditions in this field. Then, these efforts should gradually solve problems in recruiting and retaining workers in social welfare.

Key words : Image and Perceptions towards Jobs and Career in Social Welfare, Survey with high school students

＊1 Professor, School of Human Welfare Studies, Kwansei Gakuin University
＊2 Graduate, Graduate School of Human Welfare Studies, Kwansei Gakuin University